

こくほう 国宝ってなんだろう？

国宝は、日本の歴史のなかではぐくまれ、伝えられてきた財産のうち、文化財保護法という法律で「世界文化の見地から価値の高いもので、たぐいえない国民の宝たるもの」と定められているものです。法律と聞くと、国宝は難しいものだと思うかもしれませんが、しかし、下の《火焰型土器》を見て、難しいと感じるでしょうか。どっしりとした力強い形、土のざらざらした感じが残る表面、うずを巻くように盛り上がったかざり。この土器の歴史的価値や文化的価値を知らなくても、形のおもしろさには気がつくことができます。

この本では、国宝を中心とした日本の絵画、彫刻、工芸品、建物をのせています。国宝になった理由は紹介していません。国宝だからすごい、歴史があるからすごい、有名な人がつくったからすごい、といった見方をせずに、作品の色や形そのものを見てみましょう。



火焰型土器
紀元前3000年～紀元前2000年 縄文時代
土製 高さ46.5cm
新潟県佐和田市出土 宇治市博物館蔵 新潟

実際の
サイズ



《火焰型土器》は、もともとは美術作品ではなく、大昔の人の暮らしを研究するうえで重要な資料としてあつかわれてきました。しかし、1950年代になって、ひとりの芸術家が土器のもつ力強さやおもしろさに注目し、人びとにその魅力を伝えました。人びとの見方は変わり、今では、《火焰型土器》は美術作品として鑑賞されています。道真とされていた土器が、ひとりの人間の発見によって、美術品となっていったのです。この本にのっている作品を見て、好きだなと思ったら、その気持ちを覚えておきましょう。もしかしたら、あなたの好きという気持ちが、人びとの見方を変えて、新しい国宝を生み出すかもしれません。

国宝には8つのジャンルがある

国宝は、8つのジャンルに分けて指定されています。この本ではおもに、絵画、彫刻、工芸品、建造物をとりあげています。(各作品の全体図と作品データは⇒で示したページにのっています。)

絵画

平らな面に絵や文字をかいたもの。国宝の絵画は、紙や布に描かれ、かけ軸や巻物、屏風やふすまに仕立てられたものが多い。

《観經図屏風》には、紅葉するカエデの下でくつろぐ人びとが描かれている(⇒p.102)。

彫刻

立体で表した像。国宝の彫刻の多くは、仏やその守護神の姿を表している。

丸くふくらとしたほおが特徴の《釈迦如来倚像》(⇒p.60)。

《八橋時給螺鈿硯箱》は、筆などの文房具を入れるための箱(⇒p.34)。

工芸品

茶わんなどの焼きもの、漆(⇒p.204)や金でかざられた道具、刀剣など、人が使うためにつくられたもの。

建造物

人が建てたり築いたりしたもの。古い寺や神社、城などが国宝に指定されている。

《姫路城》の大大守は、現在も最上階まで登ることができる(⇒p.183)。

考古資料

発掘調査によって発見された、古い時代の道具や生活の跡のこと。大昔の人びとの暮らしについて研究する手がかりにもなる。

《埴輪(埴甲の武人)》は、地中から発見された(⇒p.122)。

書跡・典籍

書跡とは、優れた書き手が書いた文字のこと。文字が書かれている紙にも工夫がこらされていることがある。典籍は、貴重な内容や大切なことを記した本のこと。

古文書

古い時代に書かれた記録や日記、手紙など。

《風信帖》は、平安時代の僧が書いた手紙(⇒p.38)。

歴史史料

特定の文化やできごとについて、まとめて保管するべきもの。

《伊能忠敬関係資料》は、2345点の資料がまとめて国宝に指定されている(⇒p.219)。

第1章

国宝のどこを 見る？

国宝を前にしたとき、どこを見ればよいのでしょうか？
色や形、模様、表情やポーズなど、
国宝にはたくさんの見どころがあります。
この章では、それぞれの作品の見どころを、
ひとつにしばって紹介します。
見どころを知れば知るほど、
国宝に出会うのが楽しくなります。



どうして顔やうでがたくさんあるの？

この像は、ひとつひとつの顔やうでは人間に似ていますが、顔が3つ、うでが6本もあります。人間にはありえない姿で、いったい何を表しているのでしょうか？



全身

複製 阿修羅立像 (八部衆像のうち1体)

734年 奈良時代
脱活乾漆造 彩色 高さ153.4cm
興福寺 奈良

この作品のポイント

仏の守護神を表した像

この像は、人間ではなく、仏の守護神のひとつ、阿修羅を表した像です。仏やその守護神を表した像を仏像といいます。仏像は、特別な力をもつことを表すために、顔や目やうでがたくさんあったり、体が金色や赤色だったり、人間にはない特徴をもっています。仏像は、種類ごとに目や顔の特徴がこまかく定められているいっぽうで、つくられた時代や作者によって、顔の表情や体つきにちがいが表れます。左の阿修羅像にはどのような特徴があるのか、じっくり見てみましょう。

3つの顔を見比べてみよう



3つの顔は、どれもやや下を向いた静かな表情だが、眉をひそめるようすや、くちびるをかみしめるようすがわずかに異なって表されている。左右の顔は、正面の顔と接するほうの耳が省略されている。これは、3つある顔を自然に見せるための工夫である。

顔は3つ、首はひとつ

後ろから頭部を見ると、右の顔が下くちびるをかんんでいるようすがよくわかる。顔は3つだが、首はひとつで、髪の毛も頭のてっぺんでひとつに束ねられている。髪の毛のすじもていねいに表されている。



阿修羅には仲間の像が7体ある！

ここで紹介している興福寺の阿修羅像には、動物の神、音楽の神など仲間の像が7体あり、阿修羅像を加えた8体すべてが国宝に指定されている。下の像は、インドの神話に登場する鳥が仏の守護神になったもの。

人間のような体に、よろいを身につけ、鳥の顔をもつ。



複製 迦楼羅立像 (八部衆像のうち1体)

734年 奈良時代
脱活乾漆造 彩色 高さ149cm
興福寺 奈良

金色の画面で何をしているの？

金一色のふたつの画面の両端に描かれた、白と緑色の生き物。
金色の画面で、いったい何をしているのでしょうか？ そして、2体の正体とは？



複製 風神雷神図屏風
【絵】 依屋宗達
（実際のサイズの図版⇒p.21）
17世紀 江戸時代
紙本金地着色 一冊二枚
各縦 154.5×横 169.8cm
鎌倉寺 京都

この作品のポイント① 空を飛びまわる神

この絵に描かれているのは、2体の神です。白い体の神は、雷を操る雷神。たいこが連なった輪を背負い、両手にたいこを打ち鳴らすバチを持っています。緑色の体の神は、風を操る大きな袋を両手に持っていることから、風神であることがわかります。

2体とも、手足を力強く曲げたりのびたりしたポーズで、肩にかかる布は大きくなびき、足もとや体の周りには黒い雲があります。2体の神は、雲に乗って空を駆けめぐっているのです。金色の画面は、2体の姿を際立たせながら、無限に広がる空を表しています。

この絵には、画面全体に金箔が貼られている。描かれた当時は、ろうそくの明かりでこの絵を見ていた。すると、光を反射してかやかく画面に風神と雷神が浮かんでいるように見えた。装飾についてくわしくは206ページで紹介。

わき役としての風神・雷神

千手観音菩薩を拝むために描かれた絵。風神と雷神は、画面上部の左右に、千手観音菩薩の守護神として小さく描かれている。

千手観音菩薩二十八部衆像（部分図）

13世紀 鎌倉時代 絹本着色 縦97.6×横38.9cm 東京国立博物館 東京



この作品のポイント② 仏教の世界から飛び出した神

風神と雷神は、仏の守護神として、1300年以上前に中国から日本に伝わりました。寺の室内で、中央の仏像を守るために風神・雷神像がすみに置かれたり、仏教の物語を描いた絵巻の中に数多く登場したりしています。

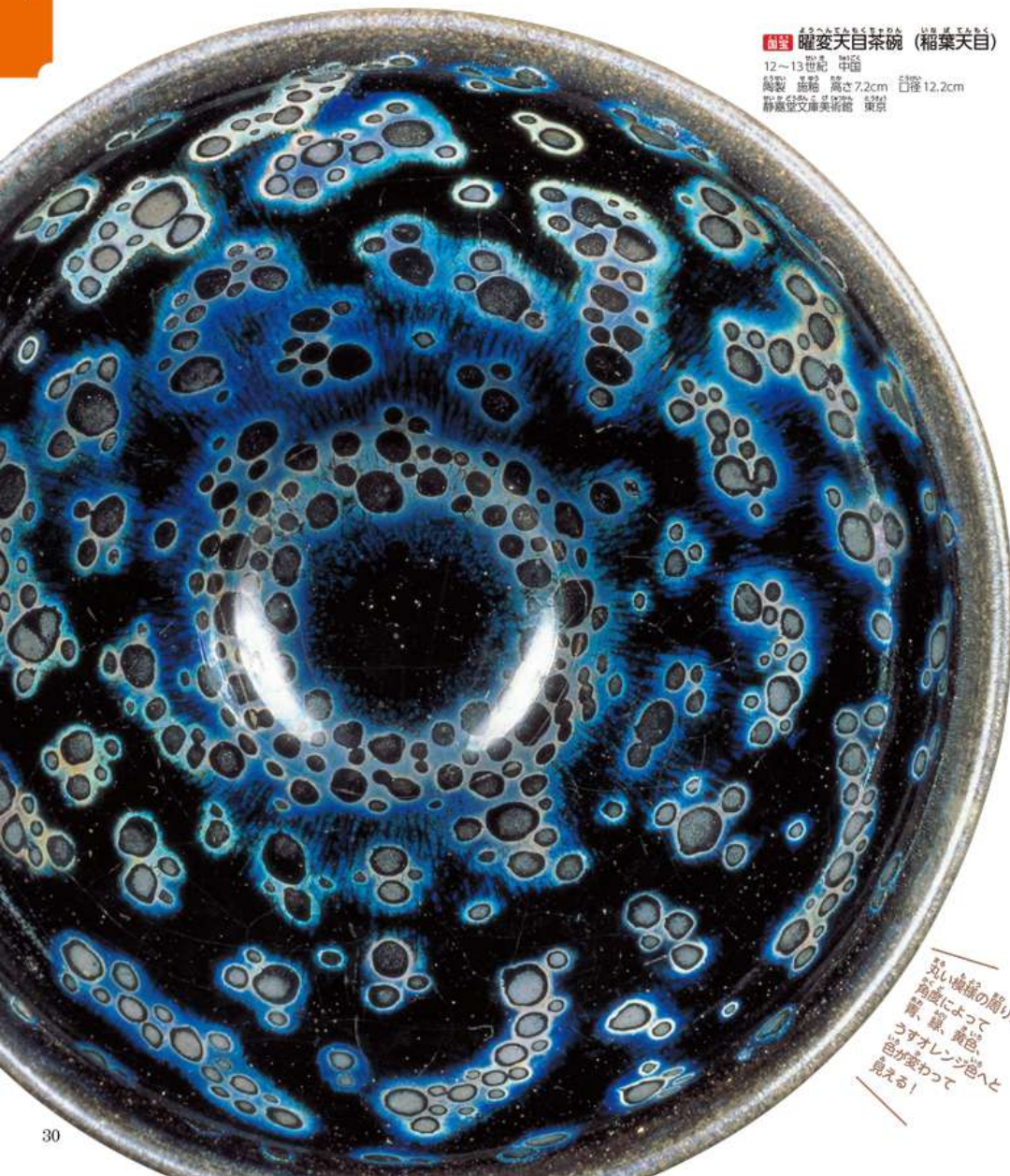
ところがこの絵には、仏は描かれず、風神と雷神だけが大きく描かれています。仏がないので、2体の神には、仏を守るという役割はあたえられていません。目や口を大きく開いたユーモラスな表情は、まるで自由を楽しんでいるかのようです。



茶わんの中を のぞいてみよう

茶わんは、土や石を材料として形をつくり、焼いてつくられます。
下の写真は、茶わんを上からのぞきこんだときのものです。
黒い地に大小の丸い模様が浮かび、
その周りがにじのようにかがやいて見えます。

国宝 曜変天目茶碗（稲葉天目）
12～13世紀 中国
陶製 施釉 高さ7.2cm 口径12.2cm
静嘉堂文庫美術館 東京



丸い模様の周りが
角座によって
青、緑、黄色、
色がかわって
見える！

この作品の ポイント 黒い茶わんの内側に 広がる模様

この茶わんは、わたしたちがご飯を盛る茶わんとはちがひ、抹茶を飲むために使われていました。抹茶を飲むための茶わんは、茶を入れる器というだけでなく、形や色、模様などをじっくりと見て楽しむものでもあります。

この茶わんのいちばんの見どころは、内側の模様です。つややかな黒い地に浮かぶ大小の丸い模様は、光が当たる角度によって銀色にかがやき、その周りは青や緑などさまざまな色に見えます。これは、茶わんを焼いてつくときの化学反応により、偶然生まれた模様です。



実際の
サイズ

茶わんの中にはいろんな模様がある！

茶わんの模様は、偶然生まれたもの、描かれたものなどさまざま。
なかでも、内側の模様は鑑賞するときの大切なポイントのひとつ。

丸い模様が オーロラのようにかがやく

左ページの茶わんとほぼ同じ時代に、中国の同じ地域でつくられた。この模様も、焼いたときの化学反応で偶然生まれたもの。ふちは、保護とかがりのために銀の輪でおおわれている。



国宝 曜変天目茶碗
12～13世紀 中国
陶製 施釉 高さ6.8cm 口径12.3cm
藤田美術館 大阪



本物の葉を貼りつけて焼く

木の葉を茶わんに直接貼りつけて焼くことで、模様を表す。貼りつけられたのはクワの葉。葉脈や虫食いの穴まではっきりと見える。

重要文化財 木葉天目茶碗
12～13世紀 中国
陶製 施釉 高さ5.3cm 口径14.7cm
大阪市立東洋館 大阪



2度焼いて描いた花模様

黒い色になる釉薬（⇒ p.203）をかけて焼いた茶わんに、花の形に切りぬいた紙を置き、茶色になる釉薬をかけて焼く。紙の部分だけもとの釉薬の黒い色が残り、花模様が浮かび上がる。

重要文化財 玳瑁散花文天目茶碗
12～13世紀 中国
陶製 施釉 高さ6.4cm 口径11.6cm
相国寺 京都



《曜変天目茶碗》の「曜」はかがやくという意味。「天目」は茶わんの形を表す。《曜変天目茶碗》は、現在世界中で3点しか残っていない。このページで紹介した2点をふくむ3点とも日本にあり、すべて国宝に指定されている。

第2章

何を表しているのか

日本の長い歴史のなかでつくれ、
伝えられてきた国宝。つくられた時代はちがっても、
表されている題材は共通しています。

それは、昔の日本の人びとが
大切に敬ってきたものだったり、
動物や植物、四季の風景など、
現代のわたしたちにもなじみの深いものだったり。
どんなものが表されているか、見てみましょう。



鬼だけどこわくない!?

地獄を描いた絵や物語のなかで、おそろしい役として登場することの多い鬼ですが、あまりおそろしくない役割の鬼もいます。ここで紹介する鬼たちは、何をしているのでしょうか。



金属の板でつくられた
ギザギザの眉毛!
体にきついヘビ。

目も口も大きく
開いている!



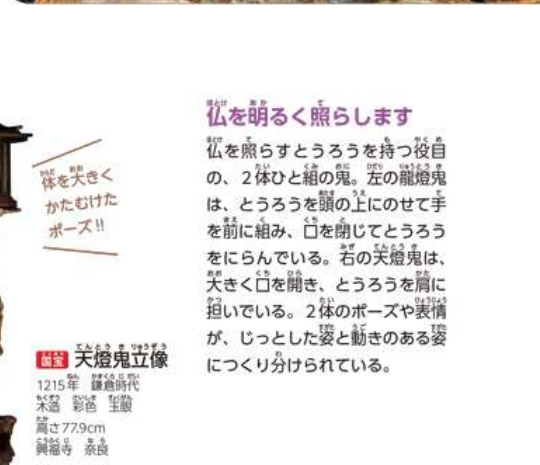
赤い鬼が人間に
変身!

人間に変身します

画面右に、堂々と歩く赤鬼が描かれている。鬼が向かった先の建物の中には、ふたりの人物がいて、ひとりには肌が赤い。建物に閉じこめられた人に会うために、右の赤鬼が人間に変身するという物語の場面が表されている。

「吉備大臣入唐絵巻」巻二 (部分画)

12世紀後半 平安時代 紙本着色墨画 4巻のうち1巻 縦32×横459.3cm
ボストン美術館 アメリカ



どっしりと
直立したポーズ!!

体を大きく
かたむけた
ポーズ!!

龍燈鬼立像
【作】康井
1215年 鎌倉時代
木造 彩色 玉眼
高さ77.3cm
興福寺 奈良

天燈鬼立像
1215年 鎌倉時代
木造 彩色 玉眼
高さ77.9cm
興福寺 奈良

仏を明るく照らします

仏を照らすとうろうを持つ役目の、2体ひと組の鬼。左の龍燈鬼は、とうろうを頭の上のせて手を前に組み、口を開けてとうろうをにらんでいる。右の天燈鬼は、大きく口を開き、とうろうを肩に担いでいる。2体のポーズや表情が、じつとした姿と動きのある姿につくり分けられている。



お守りになります

赤い鬼が、念仏を唱えて旅をする修行僧の姿で描かれている。髪はぼさぼさで、角は折れ、こわいというより親しみやすい。この絵は子どもの夜泣きを止めるお守りとして、江戸時代に入氣を集めた。

鬼の念仏

18~19世紀 江戸時代
木板 着色 紙 1幅
縦63.8×24.3cm
福岡市博物館 福岡



やっぱりこわがらせます

一見するとこわくないように見える鬼。しかし、左手で女性の髪をつかみ、地獄で入びとをこらしめる役目であることがわかる。

鬼形像

17~19世紀 江戸時代
木造 彩色 高さ63.8cm
正福寺 岩手

やっぱり鬼はこわい!!

まねして描きたい テナガザル

テナガザルは日本に生息していませんが、その姿は、多くの絵画に描かれてきました。しかも、どの絵も丸く白い顔で、目、鼻、口が中央に寄っています。これらのテナガザルの絵のもとになったのは、とある中国の絵です。



この作品の ポイント

ふわふわのテナガザルの親子の 絵は中国で誕生した

日本で描かれたテナガザルの絵のもとになった絵を探すと、中国の僧が描いた右の絵にたどりつきます。この絵は、13世紀に中国で描かれ、15世紀には日本にあったことがわかっています。丸い顔の中心に目、鼻、口をギュッと集めること、墨の線を重ねてふわふわの毛を表すことが特徴です。

当時の日本人にとって、中国の絵はあこがれの的でした。日本の絵師は、中国の絵を手本にしてまねることで絵の描き方を学びました。中国の絵をまねして描いた絵を、さらに別の絵師がまねして描くことで、似たような姿のテナガザルの絵が多く生まれたのです。

風が吹くなか
びったりと
くっつく親子。



国宝
「観音猿鶴図」猿図
【絵】牧略
13世紀 中国
絹本着色 3幅のうち1幅
縦173.9×横98.8cm
大徳寺 京都



大木の上でじゃれあう親子

短い線をていねいに重ねた毛の表現、それに対する荒々しい樹木の表現、右から左にのびる樹木の姿が、左ページの絵と共通する。子を背負う親ザルの表情は、ほほえんでいるようにも見える。



枯木猿猴図

【絵】長谷川等伯

16世紀 安土桃山時代 紙本着画 2幅 各縦155×横115cm
嵐山院 京都

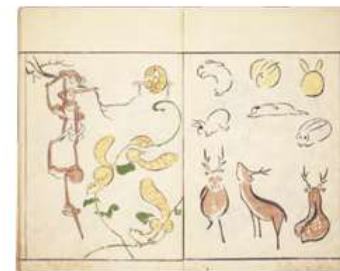
細長すぎるうで、 小さすぎる子ザル

親ザルのうでは長くのび、目、鼻、口は一直線に並んでいる。親の手からぶら下がる子ザルは、親ザルに対してとても小さく描かれている。左ページの絵の特徴が、極端に強調されている。

猿猴捉月図

【絵】伊藤若冲

1770年頃 江戸時代
紙本着画 1幅
縦114.9×横48.4cm
キンベール美術館 アメリカ



絵の描き方の教科書にも登場

だれでも動物が簡単に描けるように、手本を集めた教科書のような本。シカやウサギなど身近な動物に交じってテナガザルもっている。顔は丸く、自は小さい。

「鳥獣略図式」【絵】鉄形斎斎

1797年 江戸時代
木版 紙 1冊 縦26.5×横18.2cm
メトロポリタン美術館 アメリカ

8びきのテナガザルが
枝からぶら下がる!



文字を探せ!

ここで紹介する絵や模様の中には、文字がかくれています。
どこにあるのか、探してみましょう。



金色の文字をびっしり書いて 塔の形をつくり上げる

仏の教えを記した文章を、九重塔の形に書き写したもの。すべての文字が、同じ大きさと間隔で、縦書きで書かれている。仏の教えを表す文字が、塔と同じくらい多いという考えをもとにつくられている（寺の塔について⇒p.64）。塔の周りには、書かれた教えの内容が、絵画として色彩豊かに描かれている。

【国宝】「金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅」第九幀

12世紀 平安時代
紙本金泥唐紙着色 10幀のうち1幀 縦140×横54.8cm
中興寺大長寿院 岩手

漢字はすべて縦書きで書かれている！



きらびやかな絵の中にかくされた文字

仏の言葉が書かれた巻物の初めの部分に描かれたさし絵。雲に乗った左上の仏が、右下の女性に光を放ち、安楽の世界に生まれ変われることを示した場面。いくつかの文字がハスや岩などの形に合わせて書かれており、絵の一部のような。



右上から、左まわりに「安楽せかい」の文字。「か」と「い」の文字は、ハスの葉のふちに書かれている。

【国宝】
「平家納経」
薬王菩薩本事品
(部分図)

1164年 平安時代
紙本墨色唐紙
33巻のうち1巻
縦26×横376.1cm
ついでに
厳島神社 広島



ネコたちが体をくねらせて 文字になる

ネコと、その好物のカツオで「かつを」の文字が形づくられている。ネコは全部で11匹き。頭に袋をかぶったり、カツオをくわえたりするユーモラスなポーズで、複雑にからみ合いながら、ひらがなの曲線を表現している。



「猫の当字」かつを
【絵】歌川国芳

1842年頃 江戸時代 大判錦絵 個人蔵

模様の中に なじんだ文字

黒い漆（⇒p.204）とみがいた貝がらでかざられた、ウマのくら（人が乗るためにウマの背に置く道具）。マツとクズの葉が強い雨風に吹かれてなびくようすを、切りぬいた貝がらはめこんで模様のように描いている。よく見ると、流れるようなマツとクズの間に、文字が表されている。この文字をつなげて読むと、鎌倉時代によまれた和歌の一部になる。

【国宝】時雨蝶細鞍

13世紀～14世紀 鎌倉時代 木製 漆塗 螺鈿
前輪の高さ29.6cm 後輪の高さ33.3cm 永青文庫 東京



「時」と「雨」の文字。
漢字をくずした形だ。

だい 第3章 しょう

ひょうげん どう表現されているのか

同じものを表していても、絵画や彫刻、工芸品、
建築などのジャンルによって、表現のしかたはさまざまです。
また、同じジャンルでも、つくられた時代や
作者の意図によって、表現がまったく異なるものもあります。
さまざまな作品を見比べることで、
表現のちがいを探っていきましょう。



11の顔はどこ？

下の像は、十一面観音菩薩という仏の姿を表しています。
十一面観音菩薩は、頭部に11の顔をもちます。
しかし、下の写真では6面しか見えません。
残りの5面はどこにあるのでしょうか。



図説 十一面観音菩薩立像
9世紀前半 平安時代
木造 素地 高さ100cm
法華寺 奈良

この作品のポイント 前からだけでなく横や後ろからも見てみよう

十一面観音菩薩は、すべての人を救うために、正面の顔のほかに、11面の顔であらゆる方向を見るとされています。11面の顔は、顔部に並べて表されることがほとんどです。左ページの像は、正面に6面の顔が見えるほかに、右側に2面、左側に2面、後ろ側に1面が並べられています。

仏の像は正面から拝むため、前から見たときにたくさんの顔が見えるようにつくられています。そのいっぽうで、横や後ろにも顔があるのは、彫刻作品ならではの表し方です。



絵に描かれた十一面観音菩薩

横側や後ろ側も見ることができる彫刻と、平らな面に描かれている絵画の、表し方のちがいを比べてみよう。



国宝 十一面観音菩薩像
(実際のサイズの図版
p.18)
12世紀 平安時代
絹本着色 1幅
縦169×横90cm
奈良国立博物館 奈良

仏の顔が
ぎゅうぎゅうに
並んでいる！

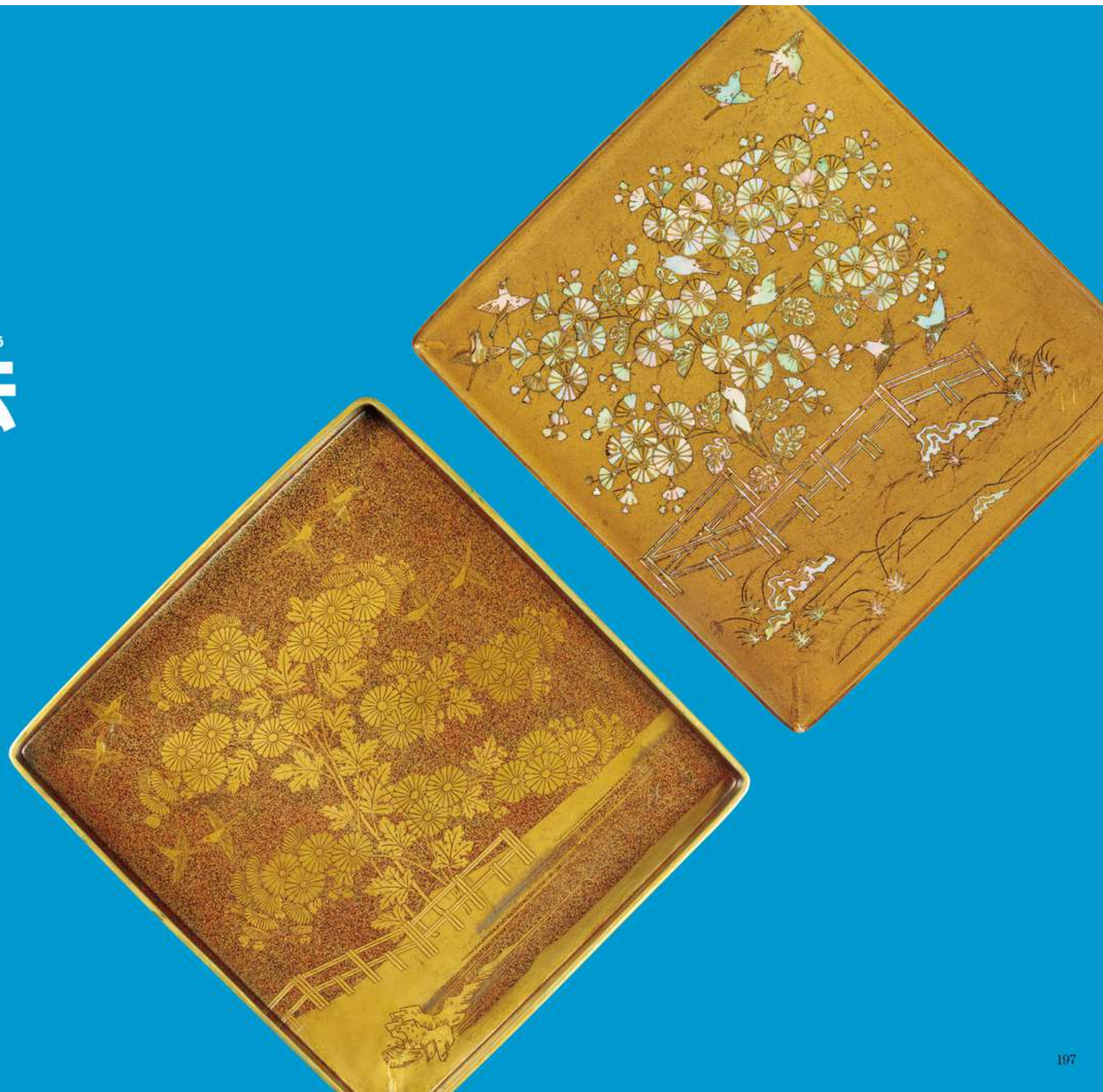
あざやかな色彩の衣服やかざりを身につけた十一面観音菩薩。顔部の11面は、すべての顔が見えるように、配置を工夫して描かれている。体の部分は朱色をぼかして描かれている。



第4章

素材と技法

国宝には、日本の自然からとれる素材と、それらの特徴を生かした技法が用いられています。自然のもつ美しさをそのまま生かしたり、特徴をよく理解して加工したり。国宝の素材と技法は、長い年月をかけて、日本各地の風土に合わせて発展し、人から人へ、現代まで受けつがれています。



すゐ には 墨は何から できている？



日本の絵画や書物の多くは、墨を使って書かれています。墨はいったいどのようにつくられているのか、材料やつくり方を探ってみましょう。

墨とは

墨は、植物の油を燃やしてできるすすに、動物の骨や皮を煮出してつくったにかわを混ぜて固めた画材。すすりですって液状にして、筆につけて使う。すすりの表面にはこまかなでこぼがあり、水といっしょに墨をすると墨がとけ出す。水の分量やすり方によって、濃さやのびが変わる。すすは、とてもこまかいつばなので、紙や布の奥に入りこみ、何千年もそのまま残る。



同じ墨でも水の分量によって濃さ変わる。

墨ができるまで

伝統の技を受けつぎ、現在も研究を重ねて墨をつくりつづけている工房を見学してみよう！

1 すすを集める



ふたで火の上をおおう

芯をさして火をともし

ナタネ油



器に植物性の油を入れて燃やすと、すすが出る。そのすすをふたで受け止め、ふたの内側についたすすを集める。油ではなく、マツの木やマツのやにを燃やしたすすを使う墨もある。



火加減やふたの位置をこまかく調整！



すすをていねいに集める。

2 にかわをとがす

にかわは、すすを固める強力なりの役目。保存用にかんそうさせたものを70度のお湯でゆっくりととがす。



にかわ液の完成！

3 すすとにかわを混ぜて練る

すすとにかわを混ぜ合わせる。初めは固いが、足に体重をかけて練りこむと、しだいにやわらかくなる。そのあと、手で転がして、さらに練る。練れば練るほど、上質な墨になる。



盛り上げるとつやつやに！

4 木型に入れて成形する



練った墨
成形のための木型

文字や図柄が彫られた木型に練った墨を入れ、強い力で上から押し成形する。まだ水分をふくんでいるので、ようかんのようによわらかい。



はみだした部分を
はさみで切り落とす。

5 灰でかんそうさせる



成形した墨を木の灰に1週間以上うめて、じっくりかんそうさせる。初めは水分を多くふくませた灰にうめ、1〜2日おきに水分の少ない灰にうめかえていく。



江戸時代から受けつがれている灰。

6 干してかんそうさせる



40年干している墨！

わらで編んでつるして、室内で1〜6か月干す。長く置くほどに墨の質がよくなるので、何十年も干すものもある。ものによっては仕上げに表面をみがいたり色を塗ったりする。



完成！

だい 第5章 しょう

こくほう みらい 国宝を未来に う受けつぐ

わたしたちが、古い時代につくられた国宝を
見ることができるのは、過去の人びとが大切に守り、
伝えてきたからです。
同じように、現代に生きるわたしたちには、
国宝を未来へと伝えていく大切な役割があります。
国宝を過去から受けつぎ、未来へとわたしていくために、
多くの人びとが力をつくしています。



こくほう 国宝に会いにいこう

国宝のなかには、多くの人に向けて公開されているものもあります。ここでは、国宝に会える場所の例を紹介し、場所によって、国宝を間近で見たり、国宝の中に入ったりといった貴重な体験ができます。



いろいろな角度から間近で見られる！

- 展示 薬師如来坐像**
8世紀後半 奈良時代～平安時代 木造 素地 高さ191.5cm
- 展示 千二神将像**
8世紀中頃 奈良時代 漆造 漆箔 彩色 11体 高さ153.6～170.1cm
ともに新薬師寺本堂 奈良
(千二神将像のうち達磨(改所蔵) 大智立像の作品データ⇒p.161)

寺や神社に行く

国宝には、寺や神社の宝として大切に伝えられてきたものが多くあり、それらが置かれている場所にも、ひとつひとつ意味がある。奈良の新薬師寺は、本堂という建物の中心に、薬師如来という仏の像が置かれ、その周りを囲むように、薬師如来の守護神の像が12体（うち国宝は11体）並べられている。建物の中は一周できるようになっていて、それぞれの像と正面から向き合うことができる。



座って見上げると、像がすごく大きく感じる！



上の仏像が置かれている新薬師寺の本堂。

- 展示 新薬師寺本堂**
8世紀後半 奈良時代 高さ約9.4m 奈良
- 新薬師寺**
住所 奈良県奈良市高畑町 1352
公式サイト <http://www.shinyakushi-ji.or.jp>

博物館や美術館に行く

博物館や美術館には、専門的な知識をもつ学芸員がいて、作品の保存や研究をしたり、展覧会を企画したりする。日本でもっとも多く国宝を保管する東京国立博物館では、展示する国宝の特徴や見どころが多くの人にわかるように、解説パネルや音声ガイド、映像などを用意している。国宝専用の展示室もあり、1点の国宝をじっくり鑑賞し、理解を深めることができる。



- 展示 灌頂幡**
7世紀後半 飛鳥時代 銅製 金 全長510cm
東京国立博物館 東京



- 東京国立博物館**
住所 東京都台東区上野公園 13-9
公式サイト <https://www.tnm.jp>

500年と複製をみ比べてみよう！

東京国立博物館の中にある法隆寺宝物館。奈良の法隆寺に伝わった品物が展示されている。ケースの中に展示されているのは、1300年以上前につくられた金属製のかがり。奥につるされた複製によって、つくられた当時の姿を知ることができる。

城に行く

国宝の建物のなかには、実際に中に入ることができるものもある。姫路城は、門をくぐったり、大天守の最上階まで登ったりすることができる。



姫路城大天守の内部。厳にせまこまれたときのために、城の構造は入り組んでいて、鉄砲や弓矢でこうげきするためのしかけもある。

- 展示 姫路城**
(作品データ⇒p.183)

- 姫路城**
住所 兵庫県姫路市本町 68
公式サイト <https://www.city.himeji.lg.jp/castle>



特定の期間しか公開されない国宝

寺や神社で保管されている国宝には、信仰上の理由や文化財保護のため公開が限られているものがある。東大寺法華堂の執金剛神立像は、厨子という入れものの中に収められ、ふだんは見ることができない。毎年12月16日の1日のみ厨子の扉が開けられ、拝むことができる。



- 展示 執金剛神立像**
(作品データ⇒p.93)